



第5回 たま エンド・オブ・ライフ・ケア交流会 報告 「高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケア」

2015年10月31日(土)午後、国立看護大学校（東京都清瀬市）で「たまエンド・オブ・ライフ・ケア交流会」が開催され、近隣の病院と訪問看護ステーションから看護職10名が参加されました。今回は、高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケアをテーマに、心不全や認知症をもつ高齢者を事例とした話題提供を頂きました。

専門分野の異なる参加者同士が活発に質問・意見交換を行い、視野を広く持つ大切さとともに、異なる分野においても看護の基本姿勢は共通であることが再確認できました。



①交流会代表 挨拶

今回の交流会で高齢者に関するテーマを設定した経緯と意義について説明がありました。

（救世軍清瀬病院
看護部長 笠原嘉子）



司会・ファシリテータ

（救世軍清瀬病院
がん性疼痛看護認定看護師 相良君映）



②高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケアを考える

高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケアに関する基本と留意点を再確認しました。

（救世軍清瀬病院
緩和ケア認定看護師 大石恵子）

③話題提供：

「高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケアを考える」



心不全の治療と症状、経過の特徴をふまえ、慢性心不全をもつ高齢患者さんの事例から、本人の思い、家族の思いを支える関わりについて振り返りました。

（多摩北部医療センター
慢性心不全看護認定看護師
神藤芳美氏）



認知症をもつ高齢の患者さんの事例をもとに、本人の立ち位置からの関わり、早期の意思確認と代弁者としての役割の重要性が強調されました。

（国立療養所 多磨全生園
認知症看護認定看護師
兼次美恵子氏）

④意見交換・感想



参加者の声より

- どんな疾患をもっても、その人の思い、家族の思い、それらを分かって代弁し、早いうちから意思決定を支えるという看護の役割が大きいと思いました。
- 患者さんの話を聞き寄り添うのは、時間の長さだけではなく、たとえ5分でも10分でも、その人のために寄り添うことを意識していきたいと思います。
- その方の最期についてどんな選択をしても、悩んで「ベスト」と思う選択をしてきたのなら、たとえ後悔は残っても、「間違いではないと感じました。

次回もお待ちしております。

2016年3月26日(土)14時 於 国立看護大学校
テーマ「エンド・オブ・ライフ・ケアの『食べる』を支える」。
詳細は <http://tama-elc.umin.ne.jp/>にも掲載します。

スタッフ

笠原嘉子・相良君映・大石恵子（救世軍清瀬病院）
河正子（NPO法人緩和ケアサポートグループ）
飯野京子・綿貫成明（国立看護大学校）